

# 澁澤龍彦 エロティシズムについて

「エロスは黒い神なのです」A・ピエール・ド・マンディアルグ

『城の中のイギリス人』

訳 澁澤龍彦

## 0 . はじめに

エロティシズムという問題は、われわれ人間が地上に生きながらえていこうとする限り不可避な問題である。エロティシズムの領域を歩いていくことは、期せずして「人間」の輪郭線をたどる事になるだろう、ぼんやりとしたものではあっても。

しかし同時にエロティシズムと言うものは禁忌という一面を持ってもいる。一種近づきたいものとしてのエロティシズムが存在することもまた事実なのである。しかし、どうしてもこのエロティシズムの発する匂いの吸引力に惹きつけられてしまう。

「どうしてなのか。」、スタートラインはここである。

想像もできないくらいに昔から人間はその文化にエロスの幻想を染みこませてきたようであり、想像もできないくらい遠くの間人も同じようにエロスの霧の中にいるようである。矛盾した二つの性質を持ち合わせているエロティシズムなるものの呪縛から人間はどうやら逃げ出せないようだ。

これから歩いていく領域は危険である。澁澤龍彦という案内人に従って一步一步と歩みを進めていく、その道程の中で幾度となくわれわれは「危険なモノ」に接近するであろう。あるいは、案内人が「強い言葉」や「不快な表現」を使って、そこに立ち現れてくる現象を説明するであろう。

本題に入る前にこのような注意事項から始めなければならないことをお許し願いたい。しかし、マンディアルグがモンキュなる人物に語らせた言葉をもう一度見てもらいたい。エロティシズムの領域を歩くならば、この言葉が後ろからついてくるはずである。われわれは注意しなければならない。

## 1 . 澁澤龍彦について

まず澁澤龍彦なる人物について語っておく必要があるであろう。そのためにはここで長々とその経歴を並べ立てるよりも、ひとつお偉いさんに出てきていただいて、その人物の口から語っていただいたほうがよさそうである。その人物とは三島由紀夫である。

澁澤龍彦は三島由紀夫と深い交流があった。三島由紀夫は澁澤龍彦についてこう語っている。

サド裁判で勇名をはせた澁澤氏というと、どんな怪物かと思うだろうが、これが見た目には優型の小柄の白皙の青年で、どこか美少年の面影をとどめるそそたる風情。しかし見かけにだまされてはいけない。胆、かめのごとく、パイプを吹かして裁判所に悠々と遅刻してあらわれるのみか、一度などは、無断欠席でその日の裁判を流してしまった。酒量は無尽蔵、酔えば、支那服の裾をからげて踊り、お座敷からイッツァ・ロングウェイまで、昭和維新の歌から革命歌まで、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、どんな歌詞でもみなそらで覚えているという恐るべき頭脳。珍書奇書に埋もれた書齋で、殺人を論じ、頽廢文学を論じ、その博識には手がつけられないが、友情に厚いことでも、愛妻家であることでも有名。この人がいなかったら、日本はどんなに淋しい国になるだろう。 <sup>1</sup>

おおよその澁澤龍彦像がご想像いただけたでしょうか。

しかし、さすがにこれでは怒られそうなので大まかなところを書いておこう。

澁澤龍彦（1928～1987）本名 澁澤龍雄

東京大学文学部フランス文学科卒（ちなみに卒論は「サドの現代性」）

1954年 ジャン・コクトー『大股びらき』の翻訳を白水社から出版

1960年 サド裁判（『悪徳の栄え(続)』サドの翻訳にて）

1969年 最高裁にて有罪判決

## 2．生殖と愛の行為

エロティシズムについて語る前に、われわれは「性とは何か」という問題について考えなければならないだろう。有性生殖における性交が必ずしもエロティシズムを生じさせるとも、またエロティシズムは必ず性交という運動を引き起こすとも言えない。しかし、一般にエロス＝性交（セックス）という図式ができていることは少なからず事実であるようだ。もちろん実際はそうではない。むしろ問題にするべきは性交へとわれわれをいやおうなしに導く「力」であろう。この「力の」の影を眺めつつ、まずは忌まわしきエロス＝性交の図式をぶち壊してしまおう。

性交とは「すべての生物を駆り立てる或る力の衝迫のもとに、同種の異性同士の二個体が結びつくこと」である。人間の性のメカニズムはその進化の果てに複雑になっている。そこで澁澤龍彦は、ジャン・ロスタンの『愛の動物誌』からゾウリムシの一例を引いて真相に迫ろうとする。要するに、最も単純な形を保っている原初的な単細胞生物の性のメカニズムを考察して、性の衝動の正体を突き止めようと言うのである。その内容はこうである。

そもそも周知の通りゾウリムシは無性生殖をおこなう単細胞生物である。淡水の沼や溝にすむ微細な滴虫ゾウリムシは一般に分裂によって増殖をおこなう。性も愛も必要としない繁殖である。しかしである、この下等動物がしばしば高等生物の性交のごとき行為にふけるのである。

ゾウリムシは時たま何も食べず、不安そうな様子で、ざわめき立つ。何かを探し求めるかのように、動き回り、互いにぶつかり合う。そのうち二匹が結びつく。互いに相手を圧迫し、口と口とを押し付けあい、まるで接吻をしているかのようなのである。さらにそののちに二個体それぞれの原形質を包んでいる膜が薄くなり消えてしまう。こうしてあけっぱなしになった二個体の細胞は自由に交じり合う。二つの核のうちの大きいほうが大核)は原形質内に溶けてしまう。そして小さい核が(小核)四つに分裂し、そのうちの三つが消えて最後の一つがまた分裂する。この二つの核のうちの一つは反対側に移動して、その後この二つの核は融合して一つの接合核を形成する。そしてまたもとのように二個体のゾウリムシに戻り接合核を分裂させて大核と小核を形成する。こうしてゾウリムシは有益な浄化作用とでも言うべきものを行なって、いわば半分だけ別のものになったのである。

これから分かることは、と澁澤龍彦は言う。

まず第一には性のない下等動物でも、立派に愛の営みを行うということ。第二には、愛の行為と繁殖の現象とは、直接に何の関係もないということ。<sup>2</sup>

繁殖するための行為であるならば、ゾウリムシはただ、よっこらしょ、と分裂しさえすればよいのである。にもかかわらず、彼らは互いに何かに急き立てられ愛の行為に似た行為を行なう。この事実から、澁澤龍彦はさらにこう言う。

生命の初歩的な段階を考察することによって得られた基本的な発見は、繁殖の現象と接合の現象とは別のものだということ。そしてまた、愛欲の現象はセクシュアリティ(有性生殖の活動)に先行しているということ。要するに、セクシュアリティは繁殖のための必要条件ではなく、せいぜい一つの生物学的な遊び、贅沢でしかないということ。<sup>3</sup>

性交、生殖の行為はそれを目的として行なわれるわけではなく、何かの「力」によって惹きつけ合い行なわれることがわかった。生殖活動と愛の営みとの無関係さはどうやら証明できたようだ。しかし、いまだに「力」はその姿を見せてくれない。そこで、さらに澁澤龍彦は、エロティシズムは人間特有のものであり動物にはエロティシズムはない、という点でさらにこの「力」の正体に迫ろうとしている。

### 3 . 人間と動物

人間に特有のエロティシズムなるものは一体どのようなものなのであろうか？そしてそれはなぜ動物には存在せず人間に特有のものなのであろうか？まず澁澤龍彦は性的なものを二つに分けている。すなわち"セクシュアル"と"エロティック"である。

愛欲（エロティシズム）は生殖本能と混同されるべきものではないのと同様、セクシュアリティとも混同されるべきものではあるまい。<sup>4</sup>

セクシュアルは生物学的概念である。前の項で見たようにセクシュアル（生殖）と言うのはエロティシズムとは直接的に関係していない。エロティックとは心理学的概念である。問題はこちらだ。

周知のようにセックスに快楽を求めるのは基本的に人間だけである（サルの中には危険を感じたり強い不安を感じる時に生殖目的でなしにセックスをするものもいる。が、果たしてそのサルは果たして本能行為の外側でその行為を行なっているのだろうか？断定はできないがそのサルの行動はセクシュアルである可能性のほうが大きいように思われる。わたしはやはりそのサルも人間とは区別されるべきだと思う。動物として！）。人間は射精までの時間を延ばしたり、性交における体位のヴァリエーションを追求したり、避妊をしたりする。これらは人間だけに見られる行為である。ジョルジュ・バタイユも澁澤龍彦の意見と同じことをこう言っている。

エロティシズムが動物の性的衝撃とは異なるのは、それが、原則として、労働と同様に目的の意識的な追及であるという点なのであって、その目的とは、官能的快楽なのだ。<sup>5</sup>

動物が性的衝撃によって結びつくときは必ずしも快楽が目的ではない。性的衝撃とは先の項目で見たところの「力」である。ゾウリムシたちは「力」によって愛の行為に導かれていくが、それは直接的には快楽に結びつかない。むしろ動物たちが導かれていく先は危険な領域である。この領域については後で説明する。先ほどと同じようにここでも動物たちはわれわれにその行為の中からヒントをくれる。動物たちの愛の行為は快楽どころではなく、しばしば非常な苦痛をともなうものである。例えば、モグラは牝の処女膜が数センチあり牡がそれをドリルのようなペニスで突き破る、このとき牝は恐怖と苦痛とから逃げまわり大きな悲鳴を上げる。さらに海がめは牝の上に牡が乗りかかって愛の行為を行なうのであるがそのとき牡は牝の首をかむ、時にはかみ殺してしまう。カマキリの例は有名だろう。このように動物たちの愛の行為は暴力的であり、しばしばその相手を死に至らしめる。ここから澁澤龍彦はエロスが死と強い関係を持っていると考察している。これはバタイユの「エロスとタナトス」の理論である。

性的快楽はきわめて破滅に接近しているので、その最も強烈な昂まりの瞬間は「小さな死」と呼ばれるほどである。<sup>6</sup>

われわれを消滅に向かって、死に向かって開く不安は、つねにエロティシズムに関係している<sup>7</sup>

何度も言っているようにエロティシズムは人間に特有のものである。であるならば、ここで問題となってくるのは人間と動物は何が違うのかということだ。バタイユは言っている

どうやら毛で覆われていたらしいネアンデルタール人は、死の認識を持っていた。この認識からこそ、エロティシズムが現れるのであって、それは人間の性生活を動物の性生活に対置するものなのだ。<sup>8</sup>

死の認識を獲得してはじめてエロティシズムが得られる。死の認識を持っているのは人間だけである。そして人間は死を畏怖し、死者を弔い、埋葬する。それはとりもなおさず宗教の最もはじめの形である。ヴァルター・シューバルトはこう言っている。

宗教と性は人間生命の最も強力な二つの原動力である。<sup>9</sup>

とどめに、ここで、澁澤龍彦がこのバタイユの思想を説明している文章を少々長いが引用したい。

生殖のための性的活動は、有性生殖と人間とに共通しているが、みずからの性的活動をエロティックな活動たらしめたのは人間だけなのである。すなわち、エロティシズムと、単なる性的活動とを区別するところのものは、生殖や子供への配慮につながる自然の目的とは独立した、一つの心理学的な探求なのである。そして死の認識は、この心理学的探求の目標としてあらわれる。<sup>10</sup>

もちろんここで、なんで死の認識がエロティシズムを浮上させるのか、という疑問がでてくるのは当然である。先ほど、愛の行為が死に近接していると言ったが、ここからはバタイユの理論を通してもう少し詳しく見ていきたいと思う。というのも、澁澤龍彦のエロティシズム論は非常に強くバタイユの影響をうけているからだ。それは澁澤龍彦本人も『エロティシズム』（中公文庫）のあとがきで述べている。その前に案内人にバタイユの前まで案内していただく。

## 5 . 「愛慕の説」からバタイユへ

生殖と性交へと駆り立てられる衝動との無関係さ、と、エロティシズムが人間特有のものであるというのは、みてきた。そしてこれから「エロスとタナトス」について詳しく見ていくのであるが、しかし、思い出して欲しい、われわれはその愛の行為へと駆り立てられる衝動がなにかということから出発したはずである。「力」の正体については以前まだ曖昧なままである。これはバタイユの理論と無縁ではない。しかしまずは澁澤龍彦の方からみていこう。はじめから予想できると思うが、この「力」なるものは非常に抽象的である。その「力」について澁澤龍彦はプラトンの「愛慕の説」を引用して説明している。

プラトンの『饗宴』に書かれている「愛慕の説」とは、美しいノスタルジックな愛の形而上学とでも言うべきものである。それによると、原初の人間は両性具有であって、その姿は球形であり、周りをぐるりと背中と横腹が取り巻いていた。しかし、傲慢な人間は神の怒りをかいすべての人間を二つに引き裂いたのである。それ以来、人間は本来の姿を失い、みなそれぞれ己の半身を求めて元の姿に戻ろうとするのである。これは澁澤龍彦の『夢の宇宙誌』のアンドロギュヌスという章に出ている文章の要約であるが、さらに付け加えることができるだろう。同性愛者とは元の姿においてアンドロギュヌスではなかったものたちなのである。現にプラトンはそこまで語っている。さらにこのような原初の人間をアンドロギュヌスであるとする神話は旧約聖書にも見受けられる。エヴァはアダムの肋骨から生まれたのだ。はじめアダムは一人であった。

これは神話の世界だけの話ではない。多くの原始民族の間では「アンドロギュヌスになる儀式」が行なわれてもいる。しかし今回はここには触れないでおこう。要するにここで問題なのは、「引き裂かれた」ということである。存在は互いにつながる可能性を持ちそれを希求している。一つ一つ閉ざされている存在が、互いにまさにゾウリムシのようにつながりあう、ここからバタイユの「連続と非連続」と言う思想に入っていこうと思う。

## 6 . ジョルジュ・バタイユの思想

エロティシズムについては、それが死にまで至る生の称揚だということができる。<sup>11</sup>

われわれは望むと望まざるとにかかわらず、「存在の孤独」というものを背負っている。個体として存在するすべてのものは、単細胞生物も多細胞生物も、植物も動物も、そして人間も膜で閉じた存在である。澁澤龍彦はこの宿命的な孤独地獄から逃れることこそ人間の最も深い欲求であると述べている。そしてバタイユはその宿命的な孤独を「非連続性」という言葉で表現した。そして澁澤龍彦が人間の最も深い欲求であった孤独からの解放を「連続性」という言葉で表現している。この中に死の認識とエロティシズムとの関係の根拠となるものが示されている。次にそのバタイユの理論を見てみたい。

### < 連続性と非連続性 >

死の認識がもたらすエロティシズムの浮上ということについて、バタイユはその独特の文体によって答えている。バタイユは連続と非連続ということについて言及する。まずバタイユは生殖をする人間存在は互いに異なっていることを述べ、さらに人間存在というものはすべからずひとりで生まれ、ひとりで死ぬものだという。ここから人間存在と他の人間存在との間には非連続性という深淵があると定義される。この深淵を除き去ることは不可能である。なぜなら、無性生殖においては一つの個体から複数の個体が生まれるが、有性生殖の場合は雌雄の個体がそろってはじめて生殖を行なうことができ、あたらしい個体を生じさせるのである。そのため、つねに存在間の溝とでもいうべきも

のを直視していなければいけない。個体同士は交わることこそできるが、互いに完全には知り合うことができないのである。個体間ではつながりはない、すなわち非連続なのである。このバタイユの言う深淵はわれわれに眩暈を起こさせ、そして同時に魅惑する。生殖とは（とりわけ有性生殖には明確にみられる）人間存在に非連続性を再認識させるものである。なぜなら先ほど言ったように、他者の存在が、人間の本質であるところの絶対的孤独を浮き彫りにするからである。しかし、それは同時に他者との性的な結びつき、強くて特殊な結びつきによって、連続性の光をみることのできる行為でもあるのだ。ここでバタイユの言う連続性とは、この肉体という有限のものから逃れ、孤独という牢獄から解放されることである。性行為においてまさに絶頂（オルガスム）に達するとき人はその快樂の中に死を（「小さな死」を）みるのだ、とバタイユが言っていることはさきほど引用した。よって、バタイユは生殖と死は非常に緊密に結びついているのである。バタイユにとって、究極の連続性とは死にほかならず、死の魅力がエロティシズムを支配しているのだ。

よく考えてみれば性交を行なうときに人間は衣服を脱ぐ。この行為は「非連続性」から「連続性」への象徴的行為と言えるのではなからうか。閉ざされている状態を脱衣することで打破するのだ。さらにバタイユはもう一つ「禁止と侵犯」と言う理論とエロティシズムとの関係を強固に主張する。すなわち、エロティシズムとは死への暴力なのである。

### < 禁止と侵犯 >

まず人間は社会と言うものを形成している。それは労働にもと基づく世界であり、いわば理性の世界である。その世界を現出させるためには規則を設ける必要がある。これは禁止である。すなわち禁止とは労働を共同体において行ない始めた人間特有のものである。逆に言えば、このように禁止を設けることで人間は動物と区別されたのである。それは自然の否定だ。バタイユはこの禁止とは暴力を排除することだと言う。一番初めにされた禁止は死者に対する禁止である。労働をはじめたネアンデルタール人は屍体に不安のような感情を持った。こうして埋葬の習慣が生まれる。もちろん埋葬するのは人間だけである。ほとんどの動物は死者を顧みる事はしない。埋葬には二つの意味がある。一つは今まで生きていた人間をこのような動かない状態にさせたおそろしい力にたいする恐怖である。この死の暴力から逃れようとして屍体を埋葬した。もう一つは屍体に新たな暴力が加わらないようにするためである。つまり、その肉を他の動物に食われないようにするためである。腐っていく屍体は暴力の証明である。たとえばそれは性的なことがらについてもまったく同じようにみられるのだ。それは血に対する禁止である。月経や処女膜が破れるときに出る血、出産の血などは禁止の対象となった。ごく最近まで初夜権というものがあつたことはその名残である。このように死に対して抱く感情と性に関して抱く感情とは大きな類似点があり比較可能である、バタイユはこういう。

暴力によって私たちが最悪の事態に立たされる場合があるということをもし私たちが知らなければ、せめて漠然とでも意識しなければ同様にして私たちは暴力に脅かされ

ることもないだろう。<sup>12</sup>

禁止はしかし常に守られるわけではない。いやむしろ破られるものである。エロティシズムは人間と動物との境界線が破られるときに生ずるのだ。侵犯、禁止を犯すことはエロティシズムと深い関係がある。

エロティシズムの領域は本質的に暴力の領域であり、侵犯の領域なのである。<sup>13</sup>

こうして禁止を破るとは言っても、それは禁止に対する無知ではなく、それを乗り越えたものである。そもそも禁止と侵犯が起こるのは、禁止の対象が聖なるものであるからである。前に見たように死や性に関する禁止は、一言に禁止と言ってしまうが早い、二面性を待っている。反発させる恐怖といやおうなく尊敬させられる魅力である。われわれは聖なるものを畏怖する、と同時に惹きつけられもする。怖いもの見たさ。

根源的な意味で聖なるものとはまさに禁じられたものである。<sup>14</sup>

このとき侵犯は、動物性への復帰、暴力への復帰にはならない。それは禁止を乗り越えたものである。動物は禁止を設けず、ゆえに禁止を守ることはない。これは動物とは境界線を引いた人間にとって羨ましいことであった。動物はいつしか神聖とされ、神にされる。この動物の神、ラスコーの壁画に描かれた神は、人間が脅かされている禁止によって制限されない。人間は特定の場合にこの侵犯を犯す。バタイユはこういう、ある時期に、ある程度まで、それをやってもよい、これが侵犯の意味だ。

動物性あるいは自然の否定の中で形成され、次に自己自身を否定し、さらにこの第二の否定のなかで自己を超越して、もはや最初に否定したものには二度と戻れなくなった人間の世界<sup>15</sup>

バタイユが言うところの、人間が侵犯を犯すのは一体いかなるときであろうか。それは祭りである。そしてそれはしばしば宗教的な儀式の形式を借りて行なわれる。

宗教というものは、おそらく、基盤においてさえ、壊乱的なものなのである。それは法律の遵守から外れさせる。少なくとも、それが命ずるものは、過度なことであり、供犠であり、祭りであって、恍惚こそが、それらの絶頂をなすのだ。<sup>16</sup>

## 7 . エロティシズムと宗教的行為

ここでは、実際の例を挙げつつまとめ的にエロティシズムと宗教的行為（祭り）について見ていきたいと思う。随分前ではあるが、引用したヴァルター・シューバルトの言うように性と宗教はそのファナティックな点において大きく類似しており、またこの「エロスとタナトス」の面からみればよりそれは明確であろうと思われる。



## a. サバト（夜宴）

サバトとは古代から民間に伝わる、グロテスクな欲望の解放である。それは秘密裏に夜中、人々が集まり乱交の限りを尽くすというものであった。中世あたりから魔女狩りなどとならんで妖術使いがおそれられたときに厳しく取り締まられたらしい。その様子を引用してみよう。これは大悪魔学者ドランクルの書物の転写である。

そこでは女もすべて裸で、髪ふり乱し、空に舞い上がったり、地上に舞い降りたりしている。……みんながみんな、みだらに踊ったり、夢中になって飲み食いしたり、けだもののごとく交わったり、破廉恥に神をののしったり、また、邪悪の復讐に心を砕いたりしている。ありとあらゆる恐ろしい、けがらわしい、四膳に反した欲望をがむしゃらに追いかけている。ガマ蛙や、マムシや、トカゲを愛玩し、魚という魚をすべて可愛がり、くさい牡山羊にぞっこんほれ込む。そして、いとおしげに牡山羊を愛撫したあげくには、まことに寒気するような話であるが、その牡山羊と交わるのだ。

17

ここには如実に宗教的なものとエロス的なものの同居がみられる。サバトを主催するのは引用でもわかるように山羊の姿をした悪魔であった。ここでは、生贄なども捧げられたらしい。

## b. サトウルヌス祭（に代表される原初宗教）

サトウルヌス祭の狂宴では、社会秩序が転覆され、主人が奴隷に仕え、奴隷が主人の寢床に横たわったのも、わざとした偶然ではない。これらの逸脱は官能的欲情と宗教的法悦との古代の合致の最も先鋭な意味を引き出した。狂宴の導入した混乱がどうであろうと、それが動物的性欲を超えて、エロティシズムを作り出したのはこの方向である<sup>18</sup>

ここには、バタイユが言うところの侵犯が隠されている。それは非日常である。社会秩序を転覆させるということは、祭りでありバタイユの言うとおり狂宴である。狂宴は、爆発的な伝染力をもつ過剰な危険である。神聖な性格を逆らうことによって肯定する性的な熱狂は狂宴特有のものである。

## c. トンガ族にみる性と聖

トンガ族は出れ蚊が死ぬと、まず死者の親族の生の源〔＝生殖器〕に死の穢れがとり憑くと考える。穢れは男の場合は精液、女の場合は膣分泌液にとり憑く。喪中ばかりか、臨終の苦しみが始まった時点で一切の性交渉がその村落の住民に禁じられる。死によって汚染されたすべてのもの（食物・畑・遺品・故人の墓を掘った親族）に課せられた禁止を解除するためには浄化が必要だ。ところで、そのとき禁止を解くための大事な儀式こそ、ほかでもない性行為そのものなのだ。その儀式は「ハランバ・ンジャカ」と呼ばれている。<sup>19</sup>

これこそ、バタイユの思想、ひいては宗教とエロスの関係をなまで語るものであろう。死に対抗しうるものは性なのである。

## 8 . 「エロスとタナトス」に対する個人的見解、或いはまとめ

これは澁澤龍彦のレジュメなのか、バタイユのレジュメなのか分からなくなってしまう。しかし、弁解すれば、それは仕方がないところである。澁澤龍彦が展開しているエロティシズム論はバタイユに大きく依拠しているのであり、澁澤龍彦のエロティシズム論を語るならば、バタイユは避けては通れないのである。

バタイユの理論は抽象的であり詩的であり、非常に分かりにくい。それを私のへたくそな文章で説明しているのだから、さぞかし曖昧模糊とした論を支離滅裂に論じているような按配になってしまっただろう。しかし、ポイントを抑えつつすすめてこれたとは思っている。

個人的には「エロスとタナトス」という理論には非常に魅かれる。しかし、死というものはそうそう容易に語るべきものではないとも思う。死とエロスを容易に結び付けて考えることには抵抗がある。が、同時に死という概念なくしてエロスを語ることは完全には不可能のように思える。はじめの注意で伝えたかったのはそのことである。このジレンマ。

死と一言で言うてしまうのは簡単だ。しかし、わたしは何としてもそれを二種類に分けたい。文学的な意味における抽象的な死すなわち精神の死と、現実的な死すなわち具体的な肉体的な死である。これはわたしの勝手な思い付きである。厳密な区別ではない。しかしこの二つを一緒にしてしまうのは非常に危険なように思えてならない。死はそうそう軽々しくは扱えない。一般論ではあるが現にそうであろう。わたしはこの二種類の死をつねに念頭においてエロスとタナトスを見てきたつもりだ。

さて、今回はこのように性理論の基礎的な部分についてみてきた。しかし、フロイトやN・ブラウンなど手を回せなかったところもある。それらは今後機会があれば見ていきたいと思う。

最後にエロティシズムとワイセツとの違いについて述べた澁澤龍彦の文章から。ちなみに社会な良風美俗に反するエロティシズムを便宜上ワイセツと呼んでいるようだ。ピンからキリまでエロティシズムが氾濫した現代でワイセツの定義など無いに等しいのではなからうか。このレジュメだってもってくところに持っていったら、さてさてどうなることか。しかしワイセツと言うものはなにもそんなに悪いもんじゃない。水着のおねえさんもマイクロミニのおねえさんも悪くは無い。あれだって非常にワイセツだと思うのだが、どうやら社会は黙認なさってるらしい。うーむ。現代社会は先ほども言ったように

エロティシズムが見えない世界である。これは問題だ。われわれは常にワイセツ感を持っていなければならない、だってもってたほうが楽しいでしょ。澁澤龍彦も言ってますよ。

女学生のセーラー制服に少しもワイセツ感をそそられないとすれば、それは重大問題である。そうなったら、文化財保護委員みたいなものをつくって、とくにワイセツと認定されたものを、保存育成しなければならなくなるであろう。<sup>20</sup>

良風美俗な人々が美術館で美的感動に浸ろうとするように、ワイセツ博物館でガラスケースの中の黒い靴下を必死に眺めワイセツ感を惹起しようと懸命になるさまは、あまり想像したくない。制服が好きな人はどうやら制服に何も感じない人よりも正常なんじゃないだろうか、さてさて。

#### [参考文献]

- 『エロスの解剖』澁澤龍彦 河出文庫
- 『夢の宇宙誌』澁澤龍彦 河出文庫
- 『エロスの人間』澁澤龍彦 中公文庫
- 『少女コレクション序説』澁澤龍彦 中公文庫
- 『エロティシズム』澁澤龍彦 中公文庫
- 『快樂主義の哲学』澁澤龍彦 文春文庫
- 『黒魔術の手帖』澁澤龍彦 河出文庫
- 『エロチシズム』ジョルジュ・バタイユ 室淳介訳 ダヴィッド社
- 『エロティシズム』ジョルジュ・バタイユ 澁澤龍彦訳 二見書房
- 『エロスの涙』ジョルジュ・バタイユ 森本和夫訳 ちくま学芸文庫
- 『エロティシズムの歴史』ジョルジュ・バタイユ 湯浅博雄/中地義和訳 哲学書房
- 『宗教の理論』ジョルジュ・バタイユ 湯浅博雄訳 ちくま学芸文庫
- 『人間と聖なるもの』ロジェ・カイヨワ 塚原史/吉本素子/小幡一雄/中村典子/守永直幹共訳 せりか書房
- 『宗教とエロス』ヴァルター・シューバルト 石川実/平田達治/山本実訳 叢書ユニベルシタス
- 『エロス論集』S・フロイト 中山元編訳 ちくま学芸文庫

- 
1. 澁澤龍彦『快樂主義の哲学』冒頭部 文春文庫
  2. 『エロスの解剖』澁澤龍彦 河出文庫 p37
  3. 同上 p38
  4. 同上
  5. 『エロスの涙』ジョルジュ・バタイユ 森本和夫訳 ちくま学芸文庫 p51
  6. 『エロティシズムの歴史』ジョルジュ・バタイユ 湯浅博雄/中地義和訳 哲学書房

p246

7. 『エロティシズムの歴史』 ジョルジュ・バタイユ 湯浅博雄/中地義和訳 哲学書房  
p116
8. 『エロスの涙』 ジョルジュ・バタイユ ちくま学芸文庫 P35
9. 『宗教とエロス』 ヴァルター・シューバルト 石川実/平田達治/山本実訳 叢書ユニベルシタス 1975 序論冒頭一文
10. 『エロシス的人間』 澁澤龍彦 中公文庫 P41
11. 『エロティシズム』 ジョルジュ・バタイユ 澁澤龍彦訳 二見書房 p16
12. 『エロティシズム』 ジョルジュ・バタイユ 澁澤龍彦訳 二見書房 p93
13. 同上 p24
14. 『エロティシズムの歴史』 ジョルジュ・バタイユ 湯浅博雄/中地義和訳 哲学書房  
2001 p127
15. 『エロティシズム』 ジョルジュ・バタイユ 澁澤龍彦訳 二見書房 p122
16. 『エロスの涙』 ジョルジュ・バタイユ 森本和夫訳 ちくま学芸文庫 p108~109
17. 『黒魔術の手帖』 澁澤龍彦 河出文庫 p114
18. 『エロチシズム』 ジョルジュ・バタイユ 室淳介訳 ダヴィッド社
19. 『人間と聖なるもの』 ロジェ・カイヨワ 塚原史/吉本素子/小幡一雄/中村典子/守永直  
幹共訳 せりか書房
20. 『少女コレクション序説』 澁澤龍彦 中公文庫 p58